

最後の日々：祖国を守る

オリンピック作戦とは、1945年11月に予定されていた九州南部侵攻という連合軍の計画のコードネームでした。計画立案者らはトルーマン米大統領に対し、この侵攻全体によって連合軍側に25万人から100万人の死傷者が発生し、さらに少なくとも同数の日本人犠牲者が出ることを予期するよう伝えました。この侵攻計画に、日本は民間人を含む大規模な陸空軍で侵攻者を迎え撃つ「決号作戦」で対応しようとしていました。15歳から60歳までの健康な男性と17歳から40歳までの女性は全員、祖国の防衛に参加するよう期待されました。

玉砕の準備

日本の指導者たちは九州の防衛を最優先としたため、人吉海軍航空基地の近くに住む軍部隊や民間人も防衛計画に含まれていました。2月には、生徒と教師が戦争遂行に協力できるよう、地域の学校での教育が停止されました。6月1日、基地での訓練は中止され、訓練生のグループは地上戦闘部隊に転換されました。中にはカムフラージュを施した塹壕を掘る訓練を受けた者もいました；彼らはそこから爆発物を持って出てきて、通り過ぎる戦車に自爆攻撃を仕掛けることになっていました。多くの民間人は、尖らせた竹槍で戦うよう訓練を受けていました。オリンピック作戦の侵攻戦線の目標は基地からわずか20キロ南にあったため、戦闘を避けることは不可能だと考えられていました。

悲劇的な最期

1945年8月6日、米国は広島に原子爆弾を投下し、これにより推定14万人が亡くなりました。その3日後の8月9日、長崎に再び原子爆弾が投下され、7万人以上が死亡しました。8月15日、昭和天皇の降伏宣言により戦争は終結しました。